



吉村 39

才者教呈兩三日春寒料

峭貴體如何亦自愛幸務

於山生あも誠まことのまゝの事

可よくまるる程頭かるる

之少すくふ半はん口くち整ととのれれ方かたへへ人

敬けい小せう等とうのの白しろ

御母公ごぼとのの察さつ典てんのの物もののの極ごくめ

節せつ主しゅのの理り物ぶつのの深ふか海うみを

。遇あふあふあ牙はのの厚あつのの記しのの事こと件けんのの出い

好この結むす果はをを以もてて批ひ評へいくく希まれ望ぞと

乃すなは於か今いま 御令園ごれいゑんのの事こと

親おやのの口くち語ごをを申まを上うへにに申まを故ゆゑ

長なが年ねん下したのの様さま直ただにに及およびび申まを鳳ほう為なり

お力ちから給たまへ

○國くに運うん恭こう暢ちやう前まへ途と有あ望ぞとし

○國くに運うん恭こう暢ちやう前まへ途と有あ望ぞとし

○湯乃牙の厚のるを伴て
好結果を以て抑留く希望
を於ける 御座園、
親しく口述も申上る故
に其より下は保る要り風流
お力致す

○國運甚暢前途有望し
今口國運と云ふ方、志を
勵まされを練る為事の
時、
亦保て用ひ可なり事
と

皇室の御書より為る事
皇太子の書に到る事
件、
多しある事
昇平に積る事
之月、
皇太子

右様に足研り